

令和2年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【 京都府 】

学校名【 京丹波町立蒲生野中学校 】

<スポーツ庁テーマ>

1 実践テーマ	【 IV 】
2 実施対象者	京丹波町立蒲生野中学校 第2学年1組・2組 47名 京都府須知高等学校食品科学科 教諭2名 園芸加工専攻科生徒6名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名（総合的な学習の時間） ② 行事名（ ） ③ その他（京都府立須知高等学校との連携事業） (2) 地域における活動 ① イベント名（日本菊花全国大会・京都府立植物園菊花展・京都府丹波自然運動公園菊花展） ② その他（ ）
4 目標 (ねらい)	日本の伝統的な菊栽培に取り組み、改めて自文化を見つめ直すことで、国際理解教育における異文化理解を進める一助とし、自己肯定感を深めながら多様な社会への理解とその一員であることを自覚し、他者への尊重と共生に向けての一步としたい。
5 取組内容	(1) 菊栽培の取組 須知高校八里教諭、食品科学科の生徒のみみなさんの指導を受け、菊の歴史や栽培方法を学び、実習に取り組んだ。  ①菊栽培の歴史の学習と挿し芽作業（7月10日） ②菊栽培の学習と鉢上げ作業（7月30日） ③鉢かえ作業（8月19日） ④脇芽処理作業（9月18日） ⑤輪台付け作業（10月9日）



[鉢かえ作業の様子]



[輪台つけ作業の様子]

(2) 展覧会出展

- ①京都府立植物園菊花展展示（10月20日～11月15日）
- ②日本菊花全国大会展示（10月20日～11月23日）
- ③丹波自然運動公園菊花展展示（10月24日～11月8日）



[丹波自然運動公園の菊花展展示]

(3) 成果発表会にむけての取組

共生社会の一員としての自覚を育む学習の一環として位置付け、成果発表会では、英語での発表や、動画、壁新聞など、誰にでも理解してもらえるような発表方法の工夫を行った。

- ①学習のまとめと発表準備（11月20日～1月11日）
- ②発表会リハーサル（1月25日～1月26日）
- ③取組の成果発表会（1月27日）
  - ア パワーポイントでの発表
  - イ 壁新聞での発表
  - ウ 英語での発表
  - エ 動画での発表



[成果発表会の様子]

6 主な成果

初めての取組であったが、京都府立須知高等学校食品科学科の八里修平教諭・百々功一実習教諭のご指導と、食品科学科食品加工コース園芸加工専攻科3年生6名のご協力により、生徒一人ひとりが積極的に取組を進めることができた。

日々の水やりや液肥やり、花を咲かせるための遮光作業など、生き物を育てることの苦労や喜びを感じながらの取組となり、日本の伝統的な菊栽培を、実体験を通してその文化の理解へとつながる貴重な体験学習となった。

事後学習では、共生社会への理解に向けた観点を踏まえ、英語での発表や、耳の不自由な方へ向けての文字動画や壁新聞での発表を行い、多様性を尊重する態度の育成につなげることができた。

須知高等学校の協力の下、京都府立植物園菊花展では特別賞、日本菊花全国大会においては、優秀賞をいただくことができた。

<p>7実践において工夫した点 (事業の特色)</p>	<p>校区にある京都府立須知高等学校食品科学科との連携事業を中心に、京都府丹波自然運動公園の菊花展への出品など、地域の活動や施設に目を向けることによって、各施設の取組と融合し、受け入れ側の高校や施設にとってもメリットがあるWin-Winの関係を構築することができた。</p>
<p>8主な課題等</p>	<p>本校としての指導に当たり、菊栽培はもとより各菊花展に関する知識等が大きく不足していたため、特に菊花展では、重要な栽培の仕上げなど須知高校八里教諭に多くを委ねる状況になってしまった。専門的な技術や知識についてはお任せせざるを得ないが、学校としてできることや、できる範囲を十分踏まえた取組にしていくことが大切である。</p> <p>発表方法の多様性を図る中で、手話での発表も考えていたが、コロナ禍の中、指導者を確保することができなかった。今後、地域のネットワークなどを活用するなど、様々な人材資源を得る方策をもつ必要がある。</p>
<p>9来年度以降の実施予定</p>	<p>地域の学校・施設との連携をもとにした活動を大切にしたい。また、日本文化の理解を通しての国際理解教育の基盤づくりを継続する観点から、今後も「菊栽培」に取り組んでいくことを考えている。</p>